

富山県氷見市におけるクマタカの初記録

中田達哉

〒935-0113 富山県氷見市惣領2172

New record of Mountain Hawk-Eagle in Himi city, Toyama Prefecture, Japan

Tatsuya Nakada

2172 Soryo, Himi-shi, Toyama 935-0113 Japan

要約：2018年7月9日に氷見市内で初記録となるクマタカ *Nisaetus nipalensis* が観察された。9月に2個体、10月に2個体、11月に1個体のクマタカが確認され、調査地周辺には少なくとも2個体のクマタカが生息している事が確認された。

はじめに

クマタカ *Nisaetus nipalensis* はタカ目タカ科の鳥類で、ロシア極東地域の一部と中国南部から東部、東南アジア、インド、日本に分布しており、日本国内では北海道、本州、四国、九州の山地の森林に生息する（日本鳥学会，2012）。本種は国内希少野生動物種に指定されており、環境省レッドリストでは絶滅危惧ⅠB類に、富山県の絶滅の恐れのある野生生物レッドデータブック富山2012（以後RDB富山，2012）では絶滅危惧Ⅰ類として記載されている希少猛禽類である（環境省，2017；富山県，2012）。

富山県（1980）によると、本種は県内の森林帯に広く分布するが、丘陵帯には生息せず、後背地に森林のある地域に限られるとされておられ、これまでに井波町東城寺、細入村猪谷、八尾町桐谷、平村祖山、利賀村阿別当、城端町瀬戸、大山町薬師太郎山、立山ブナ坂、立山町弥陀ヶ原、天狗平、大山町小原、山田村牛岳、上市町浅生、細入村庵谷峠、利賀村大谷で記録がある（富山県，1980；富山県野鳥保護の会，1991）。また、近年の県内における本種の分布が記されているRDB富山2012によると、富山県内における本種の分布は県東部の朝日町から南砺市福光町にかけての山地となっており、小矢部市や高岡市、氷見市など県北西部からの過去記録はなく、RDB富山2012

の出版された2012年以降も県北西部で本種を確認したという正確な記録はない。石川県（2009）によると、石川県内の分布は医王山以南の山地とされており、医王山は富山県西部の分布の北限である南砺市福光町と石川県の境界である事から医王山周辺が本種にとって1つの分布境界であると考えられる。

著者は2018年7月9日に氷見市内で本種を観察し、その後同年11月まで生息状況を調査した。氷見市および県北西部におけるクマタカの初記録としてここに報告する。

調査地及び調査方法

2018年7月9日に氷見市の山間部で、著者がサシバ *Butastur indicus* の警戒声を聞き、車内から8×42倍の双眼鏡で周囲を観察するとサシバの雛と思われる鳥類の雛を脚に持った大型のタカ目の鳥類1羽を確認した。個体はサシバの成鳥2羽に追われながら林内に入り見失った。

個体を確認した環境は山間部ではあるが、水田や民家の近い里山と呼ばれる環境であった。本来であれば、観察場所の緯度経度や植生などの詳しい情報を記すべきであるが、本報告書では生息地の特定につながる情報の記載は控えた。

個体と一緒に飛行していたサシバより明らかに大きく、顔は黒色、喉に1本の黒い線があり、脇

や腹には暗褐色の縞模様がみられた。翼は丸みをおび翼幅が広く、初列風切り羽7枚が指状に突出していた。尾羽は円尾で明瞭な太い黒色の帯が数本みられた。

夏季に氷見市内で確認されているタカ目の中で、サシバより明らかに体長が大きな種は、ミサゴ *Pandion haliaetus*、ハチクマ *Pernis ptilorhynchus*、トビ *Milvus migran* の3種（氷見市編さん委員会，1999；富山県，1980；富山県，2012）で、この内喉に1本の黒い線があり、顔が黒く、腹や脇が暗褐色という特徴に当てはまる種はハチクマのみである（真木，2012）。しかし、ハチクマは頭頸部が他のタカ目に比べ突出して見え、初列風切り羽の指状突出部は6枚である（真木他，2014）が、確認個体は他のタカ目の鳥に比べ頭頸部が顕著に突出しているように見えず、初列風切り羽の指状突出部は7枚であり、ハチクマの特徴とは一致しない。このように、個体の特徴は、これまで夏季に氷見市内で確認されている上記の3種には当てはまらない。

日本国内で確認されているタカ目の中で、顔が黒色、喉に1本の黒い線があり、脇や腹には暗褐色の縞模様がみられ、翼は丸みをおび翼幅が広く、初列風切り羽7枚が指状に突出しており、尾羽は円尾で明瞭な太い黒色の帯が数本みられるという確認個体の特徴に該当する種はクマタカのみであることから、個体はクマタカである。

確認されたクマタカの生息状況を調べる事を目的とした調査を2018年8月から11月の間に行った。調査は7月9日に個体を確認した場所やその周囲を観察できる場所で、9時から13時の間定点観察を行った。主に8×42倍の双眼鏡と30倍の接眼レンズを付けた88mm口径の望遠鏡で観察を行い、200mm－500mmの望遠レンズを付けたデジタル一眼レフカメラで撮影を行った。確認された個体は日時順に確認No.を付け、観察や写真から、個体の特徴（羽色や換羽、欠損の状況）が得られたものに関しては個体識別を行った。

結果及び考察

既存の文献（氷見市編さん委員会，1999；富山

県，1980；富山県，2012）によると、これまで氷見市内ではクマタカの観察記録がなかったことから、この記録は氷見市内における本種の初記録である。

生息状況調査の結果は表1の通りである。

7月9日に確認されたNo.1は顔が黒色、喉に1本の黒い線があり、脇や腹には暗褐色の縞模様がみられ、翼は丸みをおび翼幅が広く、初列風切り羽7枚が指状に突出しており、尾羽は円尾で明瞭な太い黒色の帯が数本みられるという特徴がある事から、成鳥もしくは若鳥と考えられるが、正確な齢を判断することのできる特徴や個体識別を行えるほどの情報を観察から得ることができなかった。

8月14日に行った調査では個体の確認はなかった。

9月20日に確認されたNo.2（図1）は若鳥で、首から胸にかけての体色が淡く縦斑がまばらに入り、両翼初列風切り羽（以後P）9、10が他の羽に比べ顕著に摩耗している事から幼羽と思われる、両翼P8、次列風切り羽（以後S）4、右翼S2、3が伸長中で虹彩が淡い黄色という特徴が見られた。9月22日に確認されたNo.3（図2）は若鳥で、首から胸にかけて黒い縦斑が目立ち、両翼P8－10が他の羽と比べ顕著に摩耗している事から幼羽と思われる、両翼P7、右尾羽5が伸長中、左翼P4、左尾羽6、5、4に目立つ欠損があり、虹彩が黄色という特徴がみられた。

No.2とNo.3は確認された日が近く、行動圏が重なっているが、羽の摩耗や換羽の特徴が違うことから別個体である。

また、9月22日に確認されたNo.4、5はNo.3と羽の摩耗や換羽の特徴が同じことや確認日、確認時間、行動圏が重なることから同一個体の若鳥である。

10月9日に確認されたNo.6とNo.7は同時に出現し、個体No.6が個体No.7の上空を飛行するディスプレイと思われる行動が見られたことから2羽はつがいである可能性がある。観察から2羽の齢を特定することはできなかったが、個体No.7は個体No.6より体色が淡いことから齢が若

い可能性がある。真木（2012）にはクマタカは第4回冬羽ごろからペアになる個体が多いという記述があり、この2羽がつがいであった場合第4回冬羽以降の若鳥もしくは成鳥である可能性が高い。体色の特徴が重なることや行動圏が近いことから、個体No.6は個体No.3、4、5と、個体No.7は個体No.2と同一個体の可能性があるが、観察からはこれらが同一個体であると断定できる根拠は得られなかった。

11月11日に観察したNo.8（図3）は、風切り羽と尾羽がすべて成羽に換羽しているが、虹彩が淡い黄色であることや、胸から首にかけての縦斑がまばらであることから若鳥として記録した。翼の羽は生えそろっており、P8-10が新羽で、両翼P7、6に欠損が見られた。体色や胸の模様と両翼のP8-10が新羽であった。

調査の結果、7月に1個体、9月に2個体、10月に2個体、11月に1個体のクマタカが確認された。確認された個体の中で個体識別の根拠となる特徴を得ることのできた個体が少なく、正確な個体数は把握できなかったが、9月、10月の結果が

ら調査地周辺には少なくとも2個体のクマタカが生息している事が確認された。

確認された個体のうち齢を識別できた個体は全て若鳥であった。クマタカの若鳥や幼鳥は生まれた場所から長距離移動することが鈴鹿山脈や北海道の事例から知られている（樋口，2013）。齢の記載はないが、富山県でも移動個体と思われるクマタカが呉羽山で確認されており（富山県，2012）、隣県の石川県でも既知の生息地から離れた能登半島で本種の日撃記録があることから（石川県，2009）、北陸地方に生息するクマタカの若鳥や幼鳥の中にも長距離移動を行う個体がいると考えられる。今回確認された個体もこれまで調査地近隣の県北西部や隣接する石川県の能登半島で確認例が少ないことから、既存の繁殖地からの移動個体であると考えられる。

今回行った調査だけでは、調査地周辺をクマタカがどのように利用しているかを把握することはできなかったため、今後も継続して調査を行っていきたい。

氷見市でクマタカの生息が確認されたことから、

表1 生息状況調査の結果

確認年月日	確認No.	確認時間	齢	性別	行動	体色(体羽)、*羽の特徴	備考
2018/7/9	1	11:02:04 ～ 11:02:16	不明	不明	サシバの雛を持ちながら飛行する。 サシバの成鳥2羽に追われながら林の中に入り見失う。	顔が黒く喉に線があり、脇や腹に明瞭な縞模様があり、風切り羽や尾羽に明瞭な黒い帯が見られる。	
2018/8/14	個体の確認なし						
2018/9/20	2	11:24:03 ～ 11:26:42	若鳥	不明	個体No.1を確認した位置から北に1kmほど離れた尾根上へ確認。 滑翔し南東方向へ飛行し林の中に入り見失う。	顔は黒く喉に1本の黒い線が見られるが、首から胸にかけての体色が淡く縦斑がまばらに入る。 両翼P4、5、右翼S2、3が伸長中。 P9,10が他の羽と比べ顕著に摩耗していることから幼羽と思われる。 虹彩は淡い黄色。	
2018/9/22	3	9:56:38 ～ 10:10:32	若鳥	不明	個体No.2を見失った林から現れ、付近を巡回していたサシバの幼鳥に攻撃される。 サシバの幼鳥から離れ、進路を変え北西へ飛行し、個体No.2が見られた尾根の裏に入り見失う。	顔が黒く、喉の黒い線が太い。 首から胸にかけて黒い縦斑が目立つ。 虹彩は黄色。 両翼P7、RTL5が伸長中、左翼P4、LTL6、5、4に目立つ欠損が見られた。 両翼P8-10が他の羽と比べ顕著に摩耗していることから幼羽と思われる。	体色や羽の特徴から確認No.4、5と同一個体。
	4	10:21:22 ～ 10:22:50	若鳥	不明	10:10:32に個体を見失った尾根上から現れ、南東方向へ飛行し個体No.2を見失った林内に入り見失う。	顔が黒く、喉の黒い線が太い。 首から胸にかけて黒い縦斑が目立つ。 虹彩は黄色。 両翼P7、RTL5が伸長中、左翼P4、LTL6、5、4に目立つ欠損が見られた。 両翼P8-10が他の羽と比べ顕著に摩耗していることから幼羽と思われる。	体色や羽の特徴から確認No.3、5と同一個体。
	5	10:30:31 ～ 10:32:57	若鳥	不明	10:22:50に個体を見失った林の南南東方向から現れ、ゆっくりと西方向に飛行し尾根の裏に入り見失う。	顔が黒く、喉の黒い線が太い。 首から胸にかけて黒い縦斑が目立つ。 虹彩は黄色。 両翼P7、RTL5が伸長中、左翼P4、LTL6、5、4に目立つ欠損が見られた。 両翼P8-10が他の羽と比べ顕著に摩耗していることから幼羽と思われる。	体色や羽の特徴から確認No.3、4と同一個体。
2018/10/9	6	11:27:06 ～ 11:27:23	不明	♀?	尾根の裏から現れ個体No.7の上後方を飛び固持のディスプレイと思われる並び飛行。個体No.2,3が見られた尾根裏の谷の中に入り見失う。	確認No.7.1に比べて体色が濃い。	確認No.7.1に比べ体長は小さく見えた。
	7	11:27:06 ～ 11:27:23	若鳥?	♀?	尾根の裏から現れ個体No.6の下前方を飛び固持のディスプレイと思われる並び飛行。個体No.2,3が見られた尾根裏の谷の中に入り見失う。	確認No.6.1に比べて体色が薄い。	確認No.6.1に比べ体長は大きく見えた。
2018/11/11	8	12:37:51 ～ 12:39:27	若鳥	不明	谷の中を巡回しながら上昇し、カラスに追われながら個体No.2、3を見失った尾根裏に入り見失う。	顔は黒く喉に1本の黒い線が見られる。 風切り羽と尾羽がすべて成羽である。 翼の羽は生えそろっており、P8-10が新羽。 虹彩が淡い黄色で、胸から首にかけての縦斑がまばら。	

*羽の特徴の凡例 P:初列風切り羽 S:次列風切り羽 RTL:右尾羽 LTL:左尾羽

既知の生息地である南砺市と氷見市の間に位置する高岡市から小矢部市にかけての地域にも本種が生息している可能性がある。富山県内における本種の保全を考慮する上で、県北西部の生息状況を把握することが重要と考えられる。

謝 辞

本稿を記すにあたり、富山県内におけるクマタカの分布に関する最新の知見をお教えいただいた自然博物館ねいの里の間宮寿頼氏にこの場を借りてお礼申し上げる。

引用文献

- 樋口広芳. 2013. 日本のタカ学—生態と保全, 150–155pp. 東京大学出版会. 東京.
- 氷見市編さん委員会. 1999. 氷見市史 9 資料編 7 自然環境, pp.403–423. 氷見市. 富山.
- 石川県生活環境部自然保護. 2009. 改訂・石川県の絶滅のおそれのある野生生物石川県レッドデータブック〈動物編〉2009, 54pp. 石川県生活環境部自然保護. 石川.
- 環境省自然環境局野生生物課. 2012. 猛禽類保護の進め方(改訂版)—特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて—.
- 真木広造. 2012. ワシタカ・ハヤブサ識別図鑑, 18–23, 26–29, 84–91, 98–103, 130–133pp. 平凡社. 東京.
- 真木広造・大西敏一・五百澤日丸. 2014. 決定版日本の野鳥650, 378–379, 418–419. 平凡社. 東京.
- 日本鳥学会. 2012. 日本鳥類目録改訂第7版, 206pp. 日本鳥学会. 東京.
- 富山県. 2012. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックとやま2012, pp.42. 富山県生活環境部自然保護課. 富山.
- 富山県自然保護課. 1980. 富山県の鳥獣, 70–79pp. 富山県. 富山.
- 富山県野鳥保護の会(会長 熊木信男). 1991. 富山県の鳥類—自然環境管理計画策定のための調査—, 84pp. 富山県農地林夢歩自然保護課. 富山.



図1 2018年9月20日に確認されたクマタカ(確認No.2)
〈個体の特徴〉体色が淡く胸の縦斑がまばらに入り虹彩は淡い黄色。両翼P8, S4、右翼S2, 3が伸長中で、P9, 10が他の羽と比べ顕著に摩耗している事から幼羽と思われる。



図2 2018年9月22日に確認されたクマタカ(確認No.3)
〈個体の特徴〉首から胸にかけて黒い縦斑が目立ち虹彩は黄色。両翼P7、右尾羽5が伸長中、左翼P4、左尾羽6, 5, 4に目立つ欠損が見られ、両翼P8–10が他の羽と比べ顕著に摩耗している事から幼羽と思われる。



図3 2018年11月11日に確認されたクマタカ(確認No.8)
〈個体の特徴〉風切り羽と尾羽がすべて成羽である。翼の羽は生えそろっており、P8–10が新羽。虹彩が淡い黄色で、胸から首にかけての縦斑がまばら。